

学知の責任

植民地主義の清算へ

◆1◆
太田好信



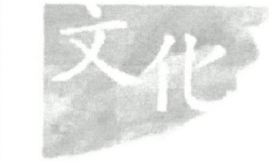
おおた・よしのぶ 九州大学
名誉教授 専門は文化人類学
著書に『雷鳴としての歴史』(ト
ランスボジションの思想など)

かつて欧米諸国や日本では、「内国」植民地から文化財、遺骨、器物などがしばしば正当とは言えない方法で収集され、時には生身の人間すら展示対象となった。それらの行為には、人類学者らが深く関わった。いまその行為を問い直し、遺骨や器物の返還を求め、運動が世界的な広がりを示している。世界各地の事例をテーマに研究者らに寄稿してもらった。

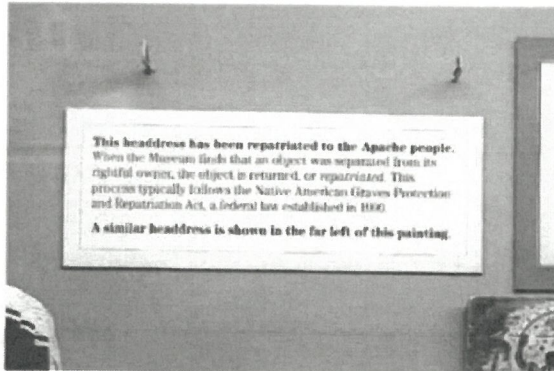
人間とは自由と真理を探求する存在だ、といわれてきた。しかし、この自明の理も、いままた多少の留保が必要である。なぜなら、20世紀の「暴力的歴史」は、真理の探究が社会的制約と複雑に絡み合っていることを暴露してしまっただけだ。たとえば、ナチス政権下で起きた暴力への反省から、「ニコルンベルク綱領」が成立し、医学研究者が実験の被験者に対して負

収集物返還 世界の潮流

過去反省 新たな関係模索



という責任を通し、はじめてその自由を得ることができるといえる。無償で与えられ、社会で自由に行使できる特権ではなく、社会に対



G. Thompson

かつて「頭飾り(ヘッドドレス)」が飾られていた博物館の壁に取り付けられた説明文。「この頭飾りはアパッチの民に返還されました。この博物館では、正当な所有者から器物が奪われたと判明したとき、その器物を返還しています」と記されている(米国・デンバー自然科学博物館、2018年筆者撮影)

避けられぬ課題

20世紀を振り返れば、グローバル化と脱植民地化は、(広義の)人類学に大きな影響を与えてきた変化である。身近な出来事を例にとれば、1990年代のウチナーンチュ大会(1990)の活動は、知の領域では先住民

し説明責任をはたしたと、許される。以上の理念のもと、現在わたしたちは「連続」というかたちで今後、本紙に登場していただく分科者とともに先住民研究形成に向けた人類学と批判的社会運動を連携する理論の構築」という研究を進めている。

あるべき場所へ

人類学は、遺骨や器物か、あるいは(無形の)社会・文化なのか、対象の置向はあるが、近代の拡大により消滅寸前に追い込まれていると想定された存在を救済しよう、と収集をおこなった。収集を可能にしていた方は、同時に破壊をつんだ方でもあり、人類学と植民地主義の歴史とを分

族が自らのためにおこなう研究である先住民研究を形成する。それは、これまで世界の先住民を研究対象にしてきた人類学に反省を迫る。先住民研究は、人類学者らに押しつけられた説明責任を、研究結果の共有や研究課題についての説明責任を、先住民研究と人類学とは分断されている。先住民運動は、社会正義の実現を目指した社会運動の一例だ。その立場からすれば、人類学は批判対象ではあっても、すぐには連携可能な相手ではない。一般論ではあるが、これまで社会運動と学問とは、信頼にはほど遠い関係しかなく、場合が多い。社会運動と人類学との間にも、また別の分断がある。

先住民研究としては黎明期にあるアイヌ民族研究や琉球民族研究の確立とならんで、社会運動との対話を進める作業は、未来における人類学という学問の可能性と密接に結びついた重要な案件と接する。しかし、未来の可能性について語る前に、過去と向き合うという課題を避けることはできない。その課題の一つが「返還」である。

「返還」にはさまざまな課題も喚び起している。しかし、世界各国から伝えられる報告のなかには、社会運動家、大学や博物館の研究者、行政関係者、国家などが、解決を求めたところと真摯に対話

を繰り返したという事例も少なくない。それらの対話が、先住民と天学や博物館との間の失われた信頼関係を回復させてつづけている。世界規模での先住民運動の隆盛とともに、近年、過去に収集された遺骨、副葬品や器物の返還要求が顕著になっている。返還とは、これら収集の結果を、本来のあるべき場所へと戻すことを意味する。国によっては既存の法改正やあらたな立法化により、また別の国ではそれらの法制度がない状況下でも、とくに博物館に収蔵されてきた遺骨、副葬品や器物は、道徳的判斷に基づき、返還され始めた。博物館だけが知の排他的管理を主張できる時代は終わりを告げている。世界は、着実に返還に向かい、動きだしている。

もちろん、返還にはさまざまな課題も喚び起している。しかし、世界各国から伝えられる報告のなかには、社会運動家、大学や博物館の研究者、行政関係者、国家などが、解決を求めたところと真摯に対話

体験平易な言葉で 人類学者のエッセー集



人類学者は、さまざまな土地を訪れて調査対象の話を聞いたり資料収集したりする「フィールドワーク」を重視する。それだけの多様な体験を専門家以外にも広く伝えようと、平易な言葉でつづったエッセー集2冊が相次ぎ出版された。

「人類学者は異文化をどう体験したか」(ミネルヴァ書房)は日本人が見た異文化